

式子内親王御詠草(二)

土田龍太郎

同じ新古今集の收むる

今はただ心の外に聞くものを

知らずがほなる萩の上風うはかせ

といへる一首、戀の部に入れれど、やさしくあはれなることたとへむかたなし。萩の上に吹きわたる風の音を聞くにつけて、もしわが思ふ人の訪おもなひ來れるにやと心ときめきせられしは昔のことにて、今その人のおとなひは絶えて久しくなりぬれば、萩の葉いかにそよぐとも、われはつれなくもてなせど、風はそを知らずがほに今もなほ吹きやまざるぞかしといふが一首のおもむきなり。知らずがほとは風につきて云へる句にて、さとは知らずがほに今なほ昔のままに吹くことよといふ意こころなりと鈴屋大人の美濃の家づとに説けるにしたがふべし。

この一首、戀の歌なるにまぎれなけれど、戀をすぐに指す詞とは一つだになし。ただなにともしなき萩の上風によせて今はあとなき昔の戀をさりげなくほめかせたまへるにつけても、内親王の奥に秘めたまへる深き思ひのかへりてせまりくる心ちするぞただならぬ。

小野小町の戀の歌、世にもてはやし來たれるが少からねど、そが中に

色見えでうつろふものは世の中の

人の心の花にぞありける

といへる一首ありて古今集に入りたり。これを本歌として内親王の詠みたまへる

さりともと待ちし月日ぞうつりゆく

人の心の花にまかせて

といふ一首、新古今集の戀の部に見ゆれど、これまためでたきことたぐひあらず。人の心は色こそなけれ花の色うつろふ如くいつしかもうつろひて、われにうとくなりにけるよ、といふ小町の歌の心をとりにて、げに頼みがたきは人の心なれば、かつてわれと親しかりしをとこのうとくなりゆけるはさることなれども、さりともふともとの心に返りてまたわれを訪ふまじきにもあらずとおぼゆるにまかせて心長く待ちみたれども、つひに訪ひこぬままにはなく時の經ぬれば、げに人の心は花のうつろふにならひて、月日もまたうつろひにけるぞかしと云ふが一首の意こころなるべし。

花の色の褪するをうつろふと云ひ、月日の過ぎゆくをもまたうつろふと云ふはつねのことなり。さればうつろふに兩つありて、語義こそはおのおの異れ、文字の上ばかりは等し

ければ、内親王、右の一首の中にて、花のうつろひにかけて時のうつろひを云ひつつ、はかなくて去いにし月日を恨みたまへるなり。本歌にてはただ心の花のうつろひのみを云へれど、内親王の歌のうへにてむねとおぼしわづらふは月日のうつろひにて、かくもすみやかに月日のうつろひぬるは、人の心の花のうつろひに習まなひしなるべしといふ意こころにさかしまにことわりたまへるわざおもしろきことたとしへなし。

同じく月日の過ぐるによせて、秘めたる昔の戀のことゆくりなく思ひ出づるまゝに詠みたまへる一首、新古今集に入りたり。

忘れてはうち嘆かるる夕べかな

われのみ知りて過ぐる月日を

深き思ひをたださりげなく詠み下したまへるこの御歌のすがたやさしきことげになべてならず。

式子内親王の御詠草數多ごえいさうあまたにて、その品またくさぐさあれば、心とむべきは戀の歌のみにもあらぬはさることにて、をりをりのけしきのおもしろきにまかせてただなだらかに詠み下したまへりし御歌少なからねど、左にはただ四五首ばかりを引きみるべし。

から衣すそ野の露に立つ霧の

たえまたえまは緑なりけり

詠なむれば衣手すずし久方の

天の川原の秋の夕暮

詠むれば木の葉うつろふ夕月夜

ややけしきだつ秋の色かな

冬の夜は木の葉がくれもなき月の

にはかにくもる初時雨かな

このたぐひの御歌の中にてことに名を得たるは新古今集の收むる

山高み春とも知らぬ松の戸に

たえだえかか雪の玉水

の一首なるべし。鈴屋大人この歌を讚めまゐらせて、春とも知らぬ松と續きたるも趣の外にほひなりと美濃の家づとに記せり。

今の世のなまさかしら人、かかる數首ひとわたりうち見て、やがて絳景歌と呼びなしてことたれりと思ひもやせむ。

げに右に引ける五首、四季の景色を謳うたひたまへるにまぎれなければ、しばらく敍景歌と呼びまゐらせむはさしも誤りならねども、かくも卓すくれたる敍景の歌のなほざりの敍景のみにてやみぬることわりさらにあるべからず。

世のなみなみの歌人うたびとならましかばいささかも心とむまじきさせることもなきおもむきにとくおぼしよりて、ただやすやすと詠みたまへるわざまことおぼろけにてはよもあらず。かかるめでたき御詠ごえいのをりをりにふと出できぬるは、みづからはかつて巧まむともほりせねども、生れつきたる大和歌のいみじき才ざいのまにまに、巧まざる巧みのはたらきのおのづから出でくるがゆゑなるべし。

(令和四年一月十四日受附)